

社会問題を解決する「ソーシャルビジネス」

これまでの経済は成長を前提に投資してリターンがある事業にお金が集まっていました。このため貧困や教育、健康、環境と言った収益が上がらない社会問題は行政やNPOが担って来ました。しかし、グローバル化などで複雑化した社会問題は既存の行政では対応が困難で、寄付金頼みのNPOは継続性に問題があり多くの社会問題が取り残されたままになっています。ところが昨今は企業でもSDGsが当たり前になるなど風向きが変わって来ました。

今、ソーシャルビジネスが注目を集めています。一般的なビジネスの目的が「利益の追求」なのに対しソーシャルビジネスは「あらゆる社会問題の解決」が目標で、利益は投資者に分配せずに新たな社会的価値を生み出すために使います。一例として㈱ボーダレス・ジャパンという福岡にも本拠がある会社を紹介しましょう。ここでは若い人たちが多くのソーシャルビジネスを社内に立ち上げ、起業家として社会問題の解決にあたっています。例えばグループ企業のジョグ株式会社はバングラデシュの貧困解決に、それまで現地では捨てられていた食用牛の皮に着目、牛皮を原料にした皮革関連事業を立ち上げました。貧困の中にある現地の人々を積極的に採用、革職人としての技術を身に付けさせ「誇り」を持って働ける環境を整備しました。私が注目したのはデザインの力を駆使して世界で通用する皮革ビジネスに育て上げた点です。デザインの基本である「人間にとって快適か」を追求して色や形、品質を高めると同時に製品になるまでの「物語」を情報としてデザインし世界に発信、多くの現地雇用を生み出し貧困対策に貢献しています。

昨今の学生は社会貢献志向が強く、就職先選びにも地球にやさしい企業かどうかを気にするようになってきました。新たな発想には若者の力が不可欠です。本学ではSDGsの取組みや地域課題解決の学びから問題意識を持って社会問題をビジネスで解決する社会起業家の誕生を期待しています。

物流を題材に探究を体験する

グローバル化の時代は世界で最も安くできる地域で生産し、それらを輸入したり加工したりして消費して来ました。また回転ずしのサーモンのように食べたいものは地球の裏側からでも空輸しています。このため物流はコストと捉えられていました。しかし、ジャストインタイムを確立したトヨタ自動車でさえ、頻発する自然災害やコロナ禍で物流が滞り、半導体などの部品が必要な時に届かず工場が止まる事態に直面しています。加えて、持続可能性の観点からカーボンフリーが優先されたり、米中の対立で輸入制限品が増えたりすることから高くついても戦略的に自国生産に切り替えるケースも出てきました。そのような中、ロシアのウクライナ侵攻で黒海が封鎖され、ウクライナ産の小麦が輸送できずアフリカなどで食糧問題が深刻化したり、経済制裁を課すドイツへの報復として天然ガスのパイプラインを止めたりする事態が発生しました。

このような現実から「食料やエネルギー自給率が低い日本は、物流が止まったらどうするのか？」という問いと課題が見つかるはずですが、課題が明らかになると次はどのような対策を取るべきかを考える探究の段階に入ります。実社会の中で自分とのかかわりが深い視点や興味ある分野の情報を集め、整理・分析して自分の考えを表現できるようにするのが探究です。例えば東日本大震災で寸断された道路に代わってJR貨物が活躍した事例などから必要な物資の調達先やルート、交通手段を複数確保する視点でアプローチする人がいます。また、自然エネルギーの比率を上げて化石燃料を減らすなど輸入量を減らしてリスクを軽減する視点に注目する人もいるでしょう。自給率を上げるという視点で年間612万t以上ある食品ロスを無くすことやマグロの養殖に着目する人がいるかもしれません。

国の生命線である物流を題材に興味ある視点で探究してみませんか？大学ではこの探究学習を通じて課題解決や新たな価値の創造を学びます。